

自然誌 だぶり 夏

Natural history

三重自然誌の会情報誌 77 号

2008年 8月

子実体が分岐したオオセミタケと松阪2号ヤンマタケ

オオセミタケ：オオセミタケ *Coraysers heteropoda* については本誌No.58でも述べましたが、現在も松阪市殿町にある民家で発生しています。普通は子実体が1本だけ出るものが多いようですが、2004年4月7日には、ホストから子実体が2本発生している個体を確認しました(写真1)。これは非常に珍しいもので、今まであまり例を見たことがありません。何故このように2本抽出するようになったのか、色々と推察はできても解明には至っていません。2008年4月13日には、子実体がホストの頭部から約4cm伸びたところから分岐しているものを確認しました(写真2)。子実体が分岐したものは例があり、それほど珍しいものではないようです。セミタケ *Corayceps sobolifera* のホストはニイニイゼミで、ニイニイゼミの終令幼虫は地表下3～4cmで斃死しています。一方、オオセミタケのホストであるアブラゼミの場合には、アブラゼミの終令幼虫は、今までの例によると20～25cm位のかなり深い地表下で斃死して子実体の抽出が始まっています。

松阪2号ヤンマタケ：ヤンマタケ *Hymenostilbe odomatae* については、トンボ研究家の八木孝彦氏によって、2001年11月10日に松阪市伊勢寺町鳥谷の里山で発見された個体が松阪地方の第1号であったと本誌No.51で述べました。2008年3月26日、2001年に発見された同じ場所で(2mも離れていない)ノシメトンボ♀に寄生したヤンマタケを八木孝彦氏が再発見されました(写真3)。ヤンマタケは周期による集団発生があると言われており、この場所がどのように発展していくのか、今後も見守ってみたいと思います。

文末ですが、情報を下さった八木孝彦氏に厚くお礼を申し上げます。



写真1 子実体が2個あるオオセミタケ



写真2 子実体分岐したオオセミタケ



写真3 松阪2号ヤンマタケ

<奥田貞助：松阪市小黒田町513-7>

私のフィールドノートから～三重県内におけるハマナツメの分布

山 本 和 彦

ハマナツメ *Paliurus ramosissimus* (写真1, 2) は、日本南部の海岸塩湿地付近にまれに生育する落葉性の低木で、本州では紀伊半島南東部と岡山県のみに産します。かつては静岡市が分布の北限となっていたましたが、この生育地は開発により絶滅し、現在、静岡県では見るできません。また、岡山県のものも数株しか生育していないそうです。あと四国で2か所、九州で10か所ほどしか群落地が確認されていません。三重県レッドデータブックでは絶滅危惧 I B 類に指定されています。



写真1 ハマナツメ

私はこのハマナツメに興味を持ち、近くの群落地で毎年幹の太さを測ったり、幹の更新を調べたりしています。また全国は無理なので、三重県内だけでもハマナツメの生育地を把握しておきたいと思い、鳥羽、志摩地方から熊野にかけての海岸部を歩いています。まだまだ足跡を残していないところが多いのですが、現在、私が把握している三重県内のハマナツメの分布をまとめてみることにしました(図1)。あわせてそれぞれの生育地点について、ハマナツメの個体数や現状等を北から順番に記しておきます。



写真2 ハマナツメの花

①塩竈浜(南伊勢町)

塩竈浜の背後にある周囲約300mの池(海跡湖)の岸边にハマナツメのまとまった群落が見られます。1995年の調査では364株の生育が確認されています。しかし最近、シカ等の食害により枯れたり衰弱しかけている株がみられるようになりました。このハマナツメ群落は三重県の天然記念物に指定されています。

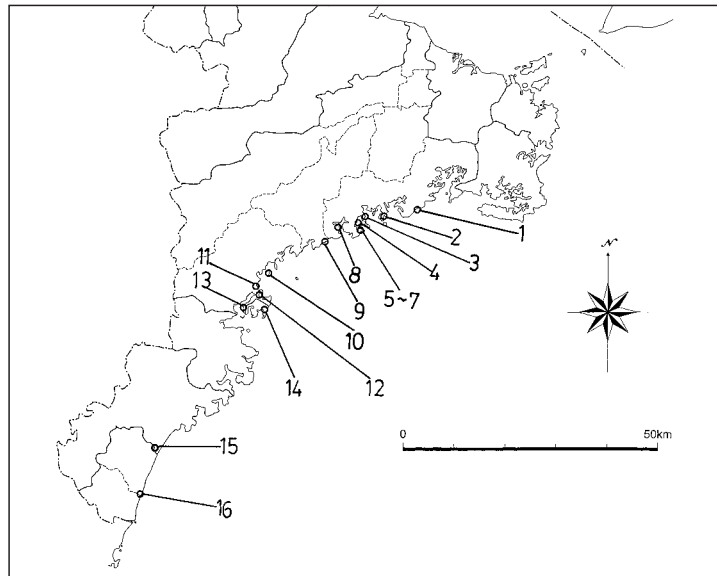


図1 三重県内でのハマナツメの分布

②かさらぎ池(南伊勢町)

奈屋浦の湾に面したかさらぎ池の東側奥に小さな群落が見られます。1995年の調査では82株のハマナツメが確認され、2002年頃までは健全な群落でした。ここもシカの食害が及んでいるかもしれませんが、最近訪れていませんので現状は不明です。

③神前浦(南伊勢町)

神前湾に面した小さな海跡湖の周囲にみられる小規模な群落です。39株の個体が確認されています(1995年の調査)。ここも最近訪れていないので、現状は不明です。

④寺倉浦Ⅰ（南伊勢町）

小方竈から寺倉浦に通じる林道の峠付近から山の斜面を礫浜に向かって降りていくと、小さな海跡湖が見えてきます。この池の周囲にハマナツメの群落が発達しています。2007年に発見し、53株の個体を確認しました。ここもシカによる樹皮剥ぎや萌芽幹の食害が目立っていました。

⑤寺倉浦Ⅱ（南伊勢町）

寺倉浦Ⅰの対岸の入り江に1株だけ生育していました。2002年に発見し、2008年調査でも健在でした。

⑥寺倉浦Ⅲ（南伊勢町）

寺倉浦Ⅱより南東側の標高130mほどの尾根を超えると（ウラジロ等が繁りかなりしんどい尾根でした）小さな入り江が現れてきます。ここにもハマナツメが5株生育していました。2004年、2008年と2回行きましたが、今のところシカの食害がみられませんでした。同じところにハマボウも生育していますが、こちらの方は2004年には気付かなかったシカによる樹皮剥ぎが目立っていました。

⑦寺倉浦Ⅳ（南伊勢町）

寺倉浦Ⅲより東に向かってさらに2つの尾根を超えると、長さ120mほどの礫浜らしきものが地形図で読み取れます。その背後には小さな池もありそうです。ここへ行こうとしましたが、道もなくブッシュをかき分けながらの山歩きで、疲れ果て断念しました。対岸の峠から双眼鏡でみると、ハマナツメの独特な樹形が見えます。おそらく10株以上は生えていると思われます。

⑧座佐池（南伊勢町）

古和浦湾の入り口に、湾に面して長さ650mほどの砂礫浜が見られます。座佐池はこの浜の背後にあり、南北に分かれた2つの大きな池が小さな水路で繋がっています。2つの池の岸边には大きなハマナツメ群落が発達しています。株数は1000株前後になると思われます。ここもシカによる樹皮剥ぎや新芽の食害が目立ち始めています。

⑨芦浜池（大紀町）

原子力発電所建設予定地として名前が知られた芦浜池ですが、海浜植物や湿地性の植物が生育し、豊かな自然が残されています。ハマナツメは主に池周辺に生育し、芦浜全体では939株（1994年の調査）の個体数が報告されています。ここも近年シカの食害が目立ってきました。池にはタケノコカワニナという珍しい貝類が生息し、また希少種のツツイトモやカワツルモなどの水草類も繁茂しています。

⑩鈴島（紀北町紀伊長島区）

鈴島は、紀伊長島区三浦より約1kmの沖合に浮かぶ標高100mほどの島で、鈴島暖地性植物群落として島全体が三重県の天然記念物に指定されています。この島の南北にそれぞれ小さな海跡湖が見られ、北側のそれは礫浜で閉ざされ海水が入らず淡水となっています。ハマナツメはこの北側の池周辺に48株（1989年調査）生育しています。最近シカやイノシシが海を泳いで渡ったようで、2006年に一頭のイノシシと二頭のシカが確認されています。2006年の調査で、シカの食害により塩湿地性植物のシバナが消滅し、島内の樹木も樹皮剥ぎの被害が目立ちだしていることがわかりました。当時はまだハマナツメへの被害はありませんでしたが、その後島に渡る機会がないため、現在でも健全なのかは不明です。

⑪大白池（紀北町海山区）

今から15年ほど前までの大白池周辺は、現在よりはるかに自然性の高い豊かな自然が残っていました。その後三重県による大規模な熊野灘臨海公園造成工事が行われ、今では以前と全く異なる人工的な景観となっています。工事によるハマナツメと池内のヨシ原の消失を最大限防ぐよう要望した結果、なんとかこの2つは保護されることになりましたが、地形や周辺植生が改変されているため、残存しているハマナツメは不自然な姿で生育しています。

公園造成工事中の1994年の調査では池周辺で32株の個体を確認されていますが、この数は現在もそ

れほど変わらずに推移していると思われます。和歌山県の故・木下慶二氏によれば、1984年当時、少なくとも81株のハマナツメが報告されていたので、多くの株が工事により消失したことは確かです。このハマナツメは今のところシカによる被害が見られません。

⑫船越池（紀北町海山区）

船越池も海跡湖で、礫浜である船越海岸より道路を隔てて約200m背後にあります。ハマナツメはこの池の岸辺に集中して群落を作っています。長崎大学の中西弘樹氏によれば船越のハマナツメ群落は日本最大の大きさだそうです。1998年の調査では、その株数は1280株でした。いつまでもこの群落地が残ってほしいのですが、民有地のためいつ埋め立てられか判らないといった状況となっています。シカによる被害はまだ目立ちませんが、樹皮剥ぎや新芽の食害が見られます。

なおこのハマナツメ群落の保護活動小史や池周辺の地形・地質、生物相、水質等の調査報告が三重自然誌No.6（2000年）上で特集されています。

⑬引本湾（紀北町海山区）

海山区矢口浦の対岸の引本湾に面した小さな礫浜の奥に、沼地のような小さな海跡湖を見つけ、道のない急なヒノキ林の斜面を降りて、やっとたどり着くことができました。沼地の周囲にはハマナツメが生育し、67株を数えました（2005年調査）。このハマナツメは大きく、40cm高での幹の直径が20cmもある株もありました。こんな太いハマナツメはこれまで見たことがありません。他の群落地では太くて直径12cmほどですから、かなり太くなっています。

2005年当時はシカの食害も見当たりませんでした。それ以降訪れていないので、現在のシカの被害状況については不明です。

⑭須賀利大池（尾鷲市須賀利町）

須賀利から急な山道を歩くこと1時間余で大池に着くことができます。礫浜の背後に形成された大きな海跡湖で池の周囲を歩くのに1時間ほどかかります。ハマナツメは池の西側岸辺に集中し、北、南、東側にも散在し、船越池に次ぐ群落となっています。

1994年の調査では1177株自生の報告があり、2004年に株数を数えたところ、1105株が確認されました。この10年間はほとんど株数が変わらずに来ていたことが窺えます。

ところが2001年頃からシカの樹皮剥ぎが目立ち始め、2007年には枯死木が至る所で見られるようになりました。2007年に株数を数えたところ、生存木は535本に激減していました。この勢いで枯れると、やがては消滅してしまうであろうということから、2007年より、ハマナツメの周囲に防護ネットを張り、その効果を現在追跡しています。

⑮大前池～志原川（熊野市、御浜町）

熊野市の南部を流れる産田川は、御浜町との境界付近で大前池に流れ込み、さらに御浜町を流れる志原川と七里御浜の河口付近で合流します。ハマナツメは、大前池の岸辺と産田川、志原川沿いに広い範囲に渡って生育しています。この地域のハマナツメの分布は花尻薫氏等によって詳しく調べられており、1994年には852株の個体が数えられています。

なお志原川周辺のハマナツメ群落は、御浜町の天然記念物に指定されています。

⑯井田川河口（紀宝町）

御浜町と紀宝町の境界付近に井田川の河口があり、七里御浜へ流れ込んでいます。この河口付近にハマナツメが30株（1994年当時）生育しています。ここが三重県におけるハマナツメの最も南の生育地となります。

以上のように、今のところ三重県におけるハマナツメの分布地は16カ所で、私のデータでは北限は南伊勢町道行竈の塩竈浜となっています。それより北ではまだ確認しておりませんが、岡与一氏か

ら2005年に次のような情報をもらっています。氏によると、1970年頃に鳥羽市相差で3～4株、志摩市渡鹿野島で3～4株自生を見ているそうです。しかし、いずれも開発により絶滅したとのこと。

また矢頭献一氏は、1959年の報告書で、南島町（現在の南伊勢町）の薄月池にハマナツメが生育していることを報告しています。この報告書をみて、薄月池へは3回ほど入っていますが、ハマナツメは確認されませんでした。

会員の皆様の中で、ハマナツメについて何か情報をお持ちの方は、当方まで知らせていただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

くやまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40>

ノハナショウブにつく虫

中 野 環

歴史の街、明和町斎宮には“斎宮のハナショウブ群落”があります。ここは1936年12月16日に国の天然記念物に指定されています(写真1)。群落指定地一帯は、明治期までは湿地が広がっていたようで、「伊勢参宮名所図絵 (1797)」や「勢陽五鈴遺響 (1883)」にもノハナショウブが自生していたことが記されているようです。しかし、現在は圃場整備による乾田化、笹川川の改修で環境が大きく変化し、かつての湿原の面影はありません。現在はポンプ管理の下で群落が維持されています。指定地ではノハナショウブの外にナガボノワレモコウやノカンゾウなどが生育し、初夏から秋にかけてさまざまな花が楽しめます。



写真1 斎宮のハナショウブ群落

ノハナショウブは北海道から本州、九州にかけての日当たりのよい湿地や草原に野生している種で、6月から7月にかけて赤紫色の花を咲かせます。多くは山間部で見られるようで、斎宮のような平野での生育は少ないようです。ハナショウブの原種と考えられています。ハナショウブはさまざまな品種があり広く栽培されていますが、ノハナショウブは三重県内では10ほどの生育地しかなく、三重県レッドデータブック2005では絶滅危惧Ⅱ類に指定されています。

5月、ノハナショウブの葉に虫がついて、葉が黄色く変色しているとの相談が明和町からあり、現



写真2 アヤメツブノミハムシ

地を訪れ確認しました。指定地には水が引かれ、ヨモギやチドメグサなどの芽生え段階にある雑草は、水没状態にあり生育するすべもありません。ノハナショウブは葉の先端が少し黄色くなっていることを除けば、個体が弱っているという印象はなく、蕾ができてつきました。

葉や茎をよく見ると大きさ2mmほどの甲虫がたくさんついています(写真2)。夕刻であったためか、甲虫はほとんど動くことはなく手ですぐに捕まえることができました。後日、県立博物館の今村隆一さんに同定を依頼したところハナショウブにつくハムシの1種でアヤメツブノミハムシ *Aphthona yuasai* Ohno, 1962との回答をいただきました。和名はアヤメにつくことから付けられたようです。ノハナショウブを枯らすほどの影響はなさそうなので少し安心しました。

くなかの たまき：度会町大野木1711-1>

シリーズ 岩石の分類

津 村 善 博

わたしたちのまわりにはいろいろな石がみられ、また、それらを利用しています。‘岩石’とは、石の範疇に入りますが、それらの岩石はどのように分類されるのでしょうか、これからシリーズで岩石の分類について紹介していきたいと思います。

まず、岩石の分類について概観してみることにします。岩石は成因的にみて、火成岩・堆積岩・変成岩の3つに分類するのが一般的です。それぞれについて簡単に説明します。

火成岩：高温のマグマが冷却・固結して形成された岩石です。マグマは溶融体で、地下の深所（下部地殻～上部マントル）で生成すると考えられています。マグマの組成のちがいが、冷却・固結場所のちがいなどで種類分けされます。マグマが主に地殻内部の深いところで冷却・固結すると深成岩が、地表で冷却・固結すると火山岩が形成されます。その中間は半深成岩となります。

	黒っぽい ←──→ 白っぽい			
火 山 岩（細粒・斑状）	ピクライト	玄 武 岩	安山岩	デイサイト・流紋岩
半深成岩		ドレライト	ひん岩	石英斑岩・花崗斑岩
深 成 岩（粗粒・等粒状）	かんらん岩	斑 れ い 岩	閃緑岩	花崗岩

堆積岩：堆積岩を成因で分けると、碎屑岩・生物岩・火砕岩・化学的沈殿岩の4つになります。碎屑岩は、既存の岩石が風化を受けてできたものが、水や風などによって他のところへ運搬され、堆積して、やがて固結するという一連の作用で形成されたものです。生物岩は動物や植物の遺体が堆積してできたものです。化学的沈殿岩は、水に溶けていた物質が化学反応でできたものです。火砕岩は火山の噴火で噴出したものが堆積し、固結したものです。火砕岩は火成岩に分類される場合もあります。

碎 屑 岩	礫岩，砂岩，泥岩（頁岩）など
生 物 岩	チャート，石灰岩，石炭など
火 砕 岩	火山角礫岩，凝灰岩など
化 学 的 沈 殿 岩	岩塩，石膏，チャート，石灰岩など

変成岩：既存の岩石が最初に形成されたときとはちがった温度・圧力下におかれたとき、その鉱物組成や組織が変化（この変化を変成作用といいます）を受けて形成された岩石です。変成作用は広域変成作用と局所変成作用の2つに大別されます。広域変成作用は広域的な構造運動に地下深所にもたらされた既存の堆積岩・火成岩・変成岩が受ける作用のことです。局所変成作用は、小規模な範囲でおこる地殻内の変成作用で、接触変成作用・動力変成作用・交代作用などの6つに細分されます。

広域変成岩		緑色片岩，青色片岩，千枚岩，片麻岩など
局所変成作用	接触変成岩	ホルンフェルス，方解石マーブル（大理石）など
	交代変成岩	スカルン
	動力変成岩	マイロナイト，カタクレーサイト，シュードタキライトなど

次回は、それぞれの岩石について詳しく説明していきたいと思います。

＜つむら よしひろ：松阪市嬉野宮古町950＞

圃場整備予定地にデンジソウが生育

山 路 武 夫

溜池改修や圃場整備などの工事をする時には、環境保全の目的で事前にその地に生育する生物の調査をするのが常です。私も植物調査を頼まれることがあり、わかる範囲で協力しています。そうした中で思いがけないものに出くわすことが時々あります。

先日、津市の水田でデンジソウを見ました。デンジソウは水田などの水湿地に長く根茎を這わせ、ところどころから伸ばした葉柄の先に四つ葉のクローバそっくりの葉を広げる湿地性のシダ植物です。三重県では、伊勢市二見で生育が確認されている以外は古い記録が各地に残っているだけの希少種です。

今回、久居の桃園から坂を下った雲出川流域の水田で生育を確認しました。この辺は、春には畑地としてキャベツなどをつくっています。収穫後は、雲出用水から水を引き入れ水田にし、少し遅れて田植えをします。デンジソウの生えている一画は漏水があるのか、湿田になっていて、休耕して少し荒れた場所もあります。土地改修目的の1つは、この一帯の整備にあると思われます。

工事はまだ先のことですが、デンジソウをどう生かしていくか、すぐには良い考えが浮かびません。農地の改修とデンジソウの生存とを両立させる方法を考えねばなりません。何か良い考えがありましたら教えてください。

くやまじ たけお：松阪市大黒田町318>



写真1 水田に生えるデンジソウ



写真2 前年の胞子のう果

三重の新しい県立博物館について～現在の状況と今後への期待～

平成19年7月23日に県知事より「三重の文化振興方針」及び新博物館のあり方について三重県文化審議会に諮問がなされました。これを受け、文化審議会では7月23日に第1回の会議を開き、検討を重ね平成20年2月に「三重の文化振興方針（仮称）」および公文書館を含めた新博物館のあり方について答申が出されました。これを受けて三重県は3月に「三重の文化振興方針」と「新県立博物館基本構想」をとりまとめました。

「新県立博物館基本構想」では、県民とともに成長する開かれた博物館、次代を担う子どもたちを育む未来志向の博物館、三重の自然と歴史・文化を総合的に据える「総合博物館」、県民の視点で三重の貴重な資産を守り活用する博物館、県内の博物館ネットワークの中核となる連携型博物館を目指しています。

「博物館の機能」として、「収集・収蔵機能」、「調査・研究機能」、「展示・情報発信機能」、「閲覧・レファレンス機能」を基本としてタテ糸に、「県民参画」、「学習支援」、「地域活動」、「人材育成」の人・地域との交流機能をヨコ糸として有機的に連動させ、県民の視点で博物館活動の幅を広げていくこととしています。

また、立地場所を県総合文化センターの南東側に隣接する「津市上浜町6丁目及び一身田上津部田地内（約3.7ha）」としています。

3月に取りまとめられた「三重の文化振興方針」および「新県立博物館基本構想」の全文や概要版は以下のURLで見ることができます。

<http://dkint01/BUNKA/HP/shingikai/naiyou.htm>

平成20年度は基本計画が策定される予定となっています。策定にあたっては、三重県文化審議会に、新県立博物館基本構想検討部会が設置され、現在、検討が行われています。基本計画が策定されれば、いよいよ新博物館がどのようなものになるのか浮かび上がってきます。広く県民のみなさんに発信していく博物館であることは言うまでもありませんが、三重県内で活躍する自然系分野の研究者にとっても活用しやすい博物館となることに期待しています。

自然系分野の拠点となる県立博物館をつくるために、収蔵庫の充実、利用可能な研究活動スペースの確保、必要な施設・設備、諸活動など、みんなで考え意見をまとめて提言していく時期にあると思います。現博物館に勤務している者として、みなさんの意見を伝え、微力ながらお役に立ちたいと思っています。

＜田村香里：三重県立博物館＞

事務局から

○新博物館整備計画、着々と進む

県立博物館の田村さんの報告にもありますように、新博物館建設の計画づくりが急ピッチです。今年度に入ってからも検討部会が何度か開催されているようで、最新の7月4日の新博物館基本計画検討部会の結果が下記HPで見られます。

<http://www.pref.mie.jp/SINGI/2008070249.htm>

また、過去の検討部会の結果はこちらです

<http://www.pref.mie.jp/SHINHAKU/HP/keikaku/index.htm>

これまでの検討結果をみるかぎりでは、われわれの思いは残念ながらほとんど伝わっていないようです。本会としましては、以前から主張しているとおり県内の自然についての調査研究、資料の収集保管を行い、その研究基盤のうえにたつた教育活動や自然環境の保全についての提言ができるような博物館になるように、最後まで声をだしていきたいと思います。

今後の計画づくりの日程は、検討部会が8月5日、21日に開かれた後、9月中旬からパブリックコメント、9月下旬、10月中旬に各地で県民懇談会の予定だそうです。また、各地で知事の「本音でトーク」も行われますので、「県内の博物館情勢からみて、新博物館は自然系を中心とした博物館であるべきだ」との意見を、各地で多数の方に言ってもらえると少しは効果があるかもしれません。お近くの懇談会やトークには参加して、ぜひ発言をお願いします。本音でトークについての詳細は下記HPで見られます。

<http://dkint01/KOHO/HP/honne/h20/>

編集後記

季節が変わるのは早いもので、もう夏ですね。調査ではシャツが搾れるほど汗をかくのですが、うっとうしいと思うことはありません。しかし、仕事の移動でかく汗はともうっとうしく感じます。やる気の問題なののでしょうか？さて、たより夏号が準備できましたのでお届けします。今回もさまざまな分野の方から原稿をいただきました！ありがとうございます。（たま）

自然誌だより77号

発行日 2008年8月1日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:mie-shizenshi@zb.ztv.ne.jp